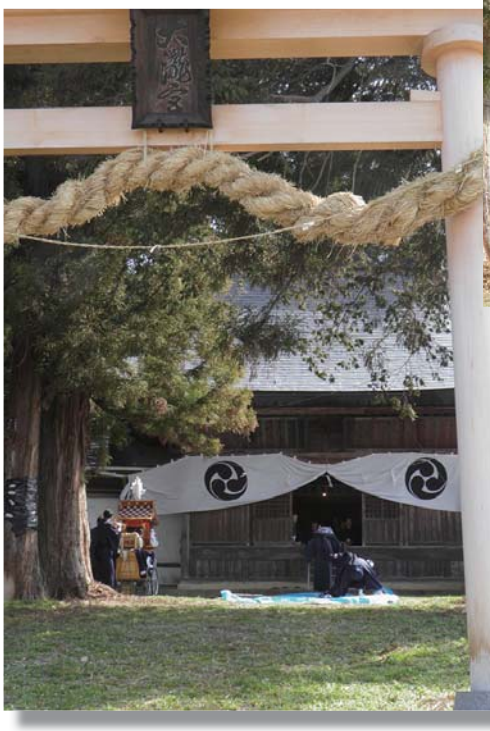
さらしなの里

友の会だより

第２４号　　２０１１・春

春祭りの大瀧社本殿



改築された鳥居

奉納される神楽

大瀧社の平成整備、鳥居新たに

仙石区の集落の最上部には地域の安泰と繁栄を見守るように大瀧社が鎮座しており、眼下には千曲川の清流、遠くは善光寺平、飯綱山を眺望することができます。

この大瀧社、元禄10年（１６９７）の「堂宮改め」では「権現の宮、小之宮有」と記され、この位置に小さなお宮があったようです。現在の大瀧社は明治9年に本殿が造営され、明治12年に拝殿が建てられました。祭神は、「伊弉冉命」「烏多岐比売命」を祀ってあるとされています。その後、明治41年には、区内の八つの神様が大瀧社境内地に合祀され、一番右手に「宇気母智神」次に「九頭龍社」「天照皇大神」「天満宮」「三島社」「秋葉社」「鹿島社」「大山祇社」の順に祀られています。

先人が、その時代時代に形を整えてきた大瀧社も、近年、鳥居が老朽化し倒壊の危険があり、その改築が望まれていました。そんな折、区民のお一人である関知美様から一千万円のご寄付をいただきました。区では、この寄付金をどのように活用するか区民要望を聞くとともに「寄付金検討委員会」を設置し、ご意見をいただきました。いろいろな活用方策が出されましたが、大瀧社の鳥居改築等に活用することで意見集約がされ、平成21年8月、区の臨時総会で事業計画等を決定しました。

設計は（有）信濃伝統建築研究所と随意契約。工事は入札の結果、（株）武田組と契約。9月26日には武水別神社の松田神官にお願いして奉告祭（起工式）を行い、同年の12月28日に竣工式を行いました。総額８０６万６千円余りをかけた「平成の大瀧社整備」、鳥居は柱間の寸法が3メートル30センチで檜材を使用。また、境内社の石積み工事に併せ、合祀した八神様の社号標（説明板）も新調しました。毎年春秋の祭りでは、紋付・袴姿に正装した区の役員、祭典係、神楽保存会の皆さんにより祭事が行われ、本殿前と境内社前の二か所では、五穀豊穣を願い、また、感謝を込め神楽が奉納されます。

（文・西澤源治、写真・関清春）

５００鉢の桜草が一堂に

毎年5月の大型連休のころ、さらしなの里歴史資料館に至る道沿いの塚田正志さんのお宅には、見事な桜草の鉢が飾られます。以下は塚田さんからのご寄稿です。

少女の日今はた遠しさくら草

富安風生

桜草は埼玉県の県花となっている。さいたま市の荒川沿いの「田島ケ原」や、やはり同じ荒川沿いの東京都北区の「浮間ケ原」などの自生地が有名だ。

江戸時代に武家により新しい品種が作り出され、現在では「さくらそう会」によって認定されたものだけでも三百種ほどになる。私のところには認定されていないものも含めて二百種類、約五百鉢あるが、11月の植え替え時には大変な作業となる。5号鉢に4つの芽をそれぞれ植えていく。

その4つの芽が翌年の4月から5月のはじめにかけてそろって咲いてくれるとうれしいのだが、なかなかそうはいかない。特にことしは3月の寒さのせいかそろっていない。基本的には強い植物なので管理さえよければ、倍以上に芽が増えるので興味のある方には差し上げている。

夏場の管理が難しく、半日陰になるようなところに鉢を置いて朝か夕方に水をたっぷりかけてやる。30度を超えるような日に水やりを忘れると、ほとんど枯れてしまう。長い間手間をかけても花を楽しむことができるのは、ほぼ2週間。花の期間が短いからこそ、いとおしい存在なのだろう。

（羽尾四区・塚田正志）

【編集部注】今年は開花が不振のため、昨年の写真を掲載しました。最上部は玄関口の棚。中央の桜草の名前は右から「青葉笛」「緋の乙女」。右下は塚田さんのお宅の裏庭に咲く路地植えの桜草です。

探検家、関野吉晴さんが講演

さらしなの里歴史資料館で2月19日、「四十年間地球を這って気づいたこと」と題する講演会がありました。講師は武蔵野美術大学教授の関野吉晴さん。人類の起源などを解き明かすテレビ番組『グレートジャーニー』でおなじみの探検家です。生命力輝く体験談を聞き、滝に打たれたようなショックと同時に清々しさを感じました。

神奈川県（沿岸民族）から長野に嫁ぎ、戸隠の山岳民族として異文化体験をして生きた40年の私の女性生活史的視点は、関野さんのあまりにスケールの広く、深い道程からすると、とるに足りないものです。やさしさ、たくましさ、勇気、発見が凝縮されているお話でした。

地球上のさまざまな民族の人々と共に暮らし、過酷な経験をされたからこその穏やかで飾らない人間性に好感を持ち、「人間の生き方の源」を教えられたような思いです。これから著書をじっくり読んで、人類の「源流の意味」を探っていきたいと思いました。（長野市・村田絢子）

〝ボックス〟の大谷商店が閉店

大谷商店（更級小学校入り口交差点）は昨年10月31日、閉店しました。昭和35年（１９６０）の創業なので、ちょうど半世紀。地域のみなさんの長年のご愛顧に謹んで御礼申し上げます。

創業時この場所は、利用者の多くが目的地とする姨捨駅と善光寺（長野市）、戸倉上山田温泉のちょうど分岐点で、川中島バスのバス停がありました。雨風がしのげる三角屋根の箱型の待合所だったそうです。その役割を出店に際し、店舗に併設したことから、店自体が「ボックス」と呼ばれ、親しんでもらいました。

左の写真が創業時の店舗で、右側の椅子が見えるスペースがそれです。待合所としてだけではなく、お菓子も扱う万屋（よろずや）だったので近所の子どもの遊び場、たまり場でもありました。戸倉上山田温泉の映画館で上映する映画のポスターを張るボード（板）には何枚も張り重ねられて分厚くなっていました。自家用車がまだ普及していない時代、更級小学校の先生たちも立ち寄り、お客さんたちはよく笑っていました。

現在は道路が整備されて少し様子が変わりましたが、創業前は戸倉上山田温泉から姨捨に向かう道は現在の小松工務店の建物（旧更級郵便局）の前をまっすぐ斜めに上っていました。そのため鋭角になった角の所にバス停があったそうです。昭和36年生まれの私には記憶がありませんが、我が家に残る下の写真にその部分が映っています。既に小屋は撤去されているようで、冠着山の姿を描いたとみられる看板が立っています。

営業半世紀、さらしな堂で再出発

タクシーでも「ボックスまで」と言えば運んでもらえ、誇らしい気持ちになると同時に、呼び名が不思議でした。洒落（しゃれ）ていて、田舎っぽくありません。小屋型のバス待合所はほかの地域にもたくさんありますが、ボックスという呼び名はあまりないようです。姨捨駅と関係があるのではと思っています。

姨捨駅と戸倉上山田温泉の間にバス路線が敷かれたのが昭和２年（１９２７）。姨捨は観月の名所として今以上に全国に知られ、多くの都会の人がやってきて温泉に泊まりました。姨捨駅舎が西洋風でハイカラであるのもそのためだと思います。旅人がちょうど山と平地の境にある小屋のバス停を「ボックス」と西洋風に呼び、それが当地に定着していったのではないでしょうか。冠着山に古代、姨捨山の異名を与えたのが都と当地を往来する旅人だったのと似ています（詳しくは更級小ホームページ掲載の「更級への旅」33・34号をご参照ください）。

閉店を知った音楽グループ「棚田バンド」のメンバーで芝原地区在住の中村洋一さんが歌を作ってくれました。洋一さんが普段使うバス停は芝原公民館近くでしたが、小さいころは建物があまりなかったので、須坂神社辺りまでバスが走って来るのが見えました。新聞配達でためた小遣いで母の日のプレゼントを買いに来て下さったそうです。プラスチック製のおにぎりの型とはし立てでした。味噌パンが大好物だったそうです。ギター演奏と歌、録音を一人でこなし、ＣＤに焼いて持って来てくださいました。多くの人に聞いてもらいたいフォークソングです。

閉店後の店舗は「さらしな堂」として使います。さらしなの里の入り口なので、ここに寄れば「さらしな・姨捨」のことはなんでも分かる場にするのが目標です。大谷商店同様、笑いが絶えない場にしたいと思います。（大谷善邦）

バス停の店ーありがとう大谷商店ー

作詞・作曲：中村洋一

1、バス停の店の　ずうっとむこうの（G Em C D7）
田んぼの中を　バスが走ってくる（G Em C D7 G）
川の向こうまで　橋をわたって（G Em C D7）
子供は１５円　大人は３０円（G Em C D7 G）
＊きのうが思い出に　なって行く（C G C D7）
今日が終わり　あしたがはじまる＊（G Em C D7 G）

2、バス停の店まで　おつかいに
塩と砂糖と　サッカリン
せんたくせっけん　はみがきこ
ついでにおやつの　みそパンひと袋
＊～＊繰り返し

3、バス停の店の　灯が消える
静かにそおっと　シャッターがおりた
時は流れる　陽は沈む
時は流れる　また陽は昇る
＊～＊繰り返し

あしたが　はじまる

おらほの冠着 24

蒸気機関車と煤煙との闘い

冠着トンネルは2656㍍の長さと25％の登り勾配が冠着駅まで続いている。明治から昭和の中ころは、質の悪い石炭（西条石炭）を使用しため、トンネル内に入るとスピードが落ちてしまい、立ち往生することもあった。

トンネルは煙突状態にもなっていたので坂井村側に空気が流れ、煤煙は機関車の前方に押し出されたため、機関士や乗客は煙と蒸気に巻き込まれ、窒息事故が発生し何人か入院している。

この対策に「引幕」が採用された。現在、御麓（みろく）と坂井村側のトンネル入り口の鉄枠に幕を巻き上げるウインチの跡（写真①）がみられる。大正のころ、御麓の故夏目幸高さんの大祖父と祖父の道定さん（写真②）の二代にわたり、御麓側の「引幕」を守ってこられた。この作業は機関車がトンネルに入ると幕を下ろす作業で、これにより機関車の後方が真空状態になり、煤煙は吸い込まれ事態は改善された。

昭和になると便数が増え、排煙が間に合わなくなった。昭和6年（1931）3月、坂井側出口に排煙装置（写真③）が設置された。この装置は船に使われていた375馬力のディーゼルエンジンで、直径8㍍の風車を回し、秒速30㍍の風を御麓側へ強制的に送った。その勢いは御麓側出口でも秒速7㍍の風速だった。

これを担当したのが坂井村の宮澤華（みやざわ・みやこ）さん（写真④）であった。華さんは昭和17年の除隊後、この任務に就き、御麓の道定さんと二人三脚で煤煙と戦い、機関士と乗客を窒息事故から守ってきた。お二人とも昭和45年2月22日、「さよなら列車」D51549の蒸気機関車（写真⑤）を見送ったのち引退した。（羽尾四区・大橋静雄）

⑤

④

②

①

③

資料館だより

「トイレの神様」助けて！

当館の案内パンフレット図に「きれいなトイレ」と記載されているのを見た時、びっくりすると同時にうれしくなりました。

どんなに素晴らしい展示物や催し物でも、トイレが汚れていれば、その施設の評価は下がり、お客様はまた訪れる気にはなかなかならないでしょう。トイレをきれいにすることは、お迎えするうえでの心遣い、おもてなしの最重要点だと思います。感激しました。

作成者の心意気に応えるため、日々館内トイレを磨き、きれいにするよう努めていますが、問題は古代体験パーク内トイレです。汚すだけでなく、空缶や衣類を投げ入れる不ら ち者がいます。注意書きを貼付するものの、効果は今一つなので、ひとひねりして、多神教である日本人特有の信心深さを利用して、朱色の鳥居を描き貼付したところ、若干の効果がありました。

しかし、これぞという解決には至りません。ヒット曲「トイレの神様」の歌を流し、利用者に「きれいにしよう」という心持ちにさせようかなどと困った時の神（紙）頼みをしています。（館長・松本英一）

〈編集後記〉写真と彩りが盛りだくさんの今号▽大瀧社は更級保育園児のころ、七五三のお祝いで千歳飴をもらった所。なぜここでだったのか▽塚田さんのお宅では冬の吊るし柿も見ものです▽大橋さんは「さよならSL」を8㍉フィルムでも撮影しているとのこと。映像の文化財です▽中村さんの歌をお聞きになりたい方は大谷まで。

編集・発行
さらしなの里友の会だより編集委員会
事務局・さらしなの里歴史資料館
〒三八九-〇八一二
長野県千曲市大字羽尾二四七の一
電話　〇二六（二七六）七五一一
Fax　〇二六（二六一）四一六一